

福島県における復興祈念公園シンポジウム ～ 公園から福島の再生を考える ～ 開催概要

福島県における復興祈念公園の検討にあたり、国土交通省東北地方整備局、福島県、双葉町、浪江町は、「福島県における復興祈念公園基本計画（案）」をもとに、今後の地域の復興と復興祈念公園との関わりを探る、「福島県における復興祈念公園シンポジウム～公園から福島の再生を考える～」を開催いたしました。

当日は、東京大学大学院工学系研究科 横張 真 教授（福島県における復興祈念公園基本計画検討調査有識者委員会 委員長）に基調講演を頂くとともに、パネルディスカッションを行いました。ご参加頂いた方々は約180名に及び、ふるさとと人々を結ぶ縁（よすが）のあり方や公園と福島県の復興まちづくりとの関係等多数のご意見・ご感想を頂きました。このシンポジウムの成果を活かしつつ、一層復興祈念公園の検討を行ってまいります。

- 日 時：平成30年6月2日（土）10:00～12:00
- 会 場：福島市子どもの夢を育む施設 こむこむ館 わいわいホール
- 主 催：国土交通省東北地方整備局・福島県・双葉町・浪江町

第1部 基調講演 「福島県における復興祈念公園について」

講師：横張 真（東京大学大学院工学系研究科教授）

講演概要

- 平成28年度に基本構想を策定し、「生命（いのち）をいたみ、事実をつたえ、縁（よすが）をつなぎ、息吹よみがえる」という基本理念を定めた。ここでは、「生命（いのち）をいたみ」を「追悼・鎮魂」、「事実をつたえ」を「伝承」、「縁（よすが）をつなぎ、息吹よみがえる」を「復興・発信」と言い換える。「追悼・鎮魂」は国営追悼・祈念施設（仮称）等として主に公園区域北側にその機能を配置し、「伝承」はアーカイブ拠点施設との連携等により主に公園区域南側に、「復興・発信」はその両者を結ぶ前田川を中心とした公園区域中央等にその機能を配置した。
- 復興祈念公園の性格上、追悼・鎮魂のための静謐な空間は必要だが、そもそも公園とは何かと考えたとき、特に、「復興・発信」の場については、地元の方のみならず福島県の方々あるいは日本中の方々が「何度でも行ってみたい」、訪れた子どもたちが「またあそこに行きたい」と言って公園で楽しむ姿が展開されることを目指すべきではないだろうか考える。
- さらに、復興祈念公園が周辺地域の復興の象徴になるとともに、周辺地域の復興に公園が支えられるという関係性の中で、「追悼・鎮魂」、「伝承」、「復興・発信」が重層的に周辺へと滲み出し、周辺のまちづくりと一体化して、強い意志の発信につながっていくことが重要である。

第2部 パネルディスカッション

コーディネーター：横張 真（前掲）

パネリスト：市岡 綾子（日本大学工学部専任講師）

長林 久夫（日本大学工学部名誉教授）

金田 勇（双葉副町長）

本間 茂行（浪江副町長）

パネリストの主なご意見

市岡 綾子

○地域で日常生活を営む人やここを訪れて思いを馳せる人が共存できる場として復興祈念公園が存在し、世代が変わってもそれぞれの立場で思いを寄せることのできる空間とすることが重要である。

長林 久夫

○復興祈念公園と地域を誰がどう結ぶかが課題であり、公園の管理・運営のみならず、地域の活動を自立的かつ継続的に行ううえでも、コーディネーターの育成やサポート体制の構築といった組織づくり・仕組みづくりが重要である。

金田 勇

○今なお避難指示が続く中、町への帰還に対する町民の考え方は多様である。復興祈念公園が、立場や世代を超えて誰にとっても心の拠り所となり、町の復興について考えるきっかけとなるような場となってほしいと願っている。

本間 茂行

○復興祈念公園の空間配置方針である「過去」、「震災から現在」、「未来」の時間軸の観点に寄り添いながら、これまでの町民と今後新しく住む町民が一体となり、過去を意識しつつも未来へと進んでいくという気持ちを持つことが重要である。

参加者の主なご意見

- 3. 11を思う人があの日を振り返り、思いにふけることのできる場であってほしい。
- 震災前の記憶や震災当時の状況が分かるようにしてほしい。
- 花や伝統芸能を生かした公園づくりをしてほしい。
- 想いの場であり、何度も足を運んでもらう公園になってほしい。
- 復興祈念公園が、被災地に人を呼び、地域活性化につなげてほしい。
- この公園から福島復興をPRできるようにお願いしてほしい。 など



第1部 基調講演



第2部 パネルディスカッション



会場の様子